

19 文学的な文章を読む

組		
番号		
氏名		

◇ 次の文章は、明治時代に書かれた「吾輩は猫である」の一部です。
これを読んで、問いに答えなさい。

「ここまでのあらずじ」吾輩は猫である。名前はまだない。笹原の中に捨てられた吾輩は、食べ物を求めて忍び込んだある家に住み着くようになった。教師をしているその家の主人には様々な客があり、吾輩は、人間とは思議なものだと思いつながら、主人や来客の姿を観察している。

こう暑くては猫といえどもやりきれない。皮を脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだといギリスのシドニー・スミスとかいう人が苦しがつたという話があるが、たとい骨だけにならなくともいいから、せめてこの淡灰色の斑入りの毛衣だけはちよっと洗い張りでもするか、もしくは当分のうち質にでも入れたいような気がする。人間から見たら猫などは年が年じゅう同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至って単純な無事な銭のかからない生涯を送っているように思われるかもしれないが、いくら猫だって相応に暑さ寒さの感じはある。たまには行水の一度ぐらいあびたくないこともないが、なにしろこの毛衣の上から湯を使った日にはかわかすのが容易なことでないから汗臭いのを我慢してこの年になるまで銭湯ののれんをくぐったことはない。おりおりは団扇うちわでも使ってみようという気も起こらぬではないが、とにかく握ることができないのだからしかたがない。それを思うと人間はぜいたくなものだ。生で食ってしかるべきものをわざわざ煮てみたり、焼いてみたり酔に漬けてみたり、味噌みそをつけてみたり好んでよけいな手数をかけてお互いに恐悦おそしている。着物だってそうだ。猫のように一年じゅう同じ物を着通せというのは、不完全に生まれついた彼らにとって、ちと無理かもしれないが、なにもあんなに雑多なものを皮膚の上へ載せて暮らさなくてものことだ。羊の御厄介ごやくわいになったり、蚕のお世話さなのおせわになったり、綿畑のお情けさえ受けるに至ってはぜいたくは無能の結果だと断言してもいいくらいだ。

（夏目漱石「吾輩は猫である」による。）

（注 1）シドニー・スミスはイギリスの著作家

（注 2）たといはたとえ。

（注 3）斑入りはまだら模様。

（注 4）洗い張りは洗濯してしわを伸ばすこと。

（注 5）質にでも入れたい質屋にでも預けたい。

（注 6）年が年じゅう一年中。

（注 7）一枚看板はここでは、一枚しかない衣服のこと。

（注 8）恐悦はひどく喜ぶこと。

（注 9）暮らさなくてものことだは暮らさなくてもすむことだ。

1 棒線部「羊の御厄介になったり、蚕のお世話になったり、綿畑のお情けさえ受ける」とありますが、この部分は、人間が何をどうすることを表したものです。十字以内で書きなさい。

2 山田さんと中川さんは、この文章で面白いと感じた点について話し合っています。次は、二人が【注目した表現】と【話し合いの一部】です。【話し合いの一部】で山田さんは、「③と④には、共通した面白さがあるよね。」と発言しています。あなたは、③と④には、どのような共通した面白さがあると考えますか。あなたの考えを、「【注目した表現】③と【注目した表現】④には、」に続けて、三十文字以上、五十文字以内で書きなさい。
 なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

【注目した表現】

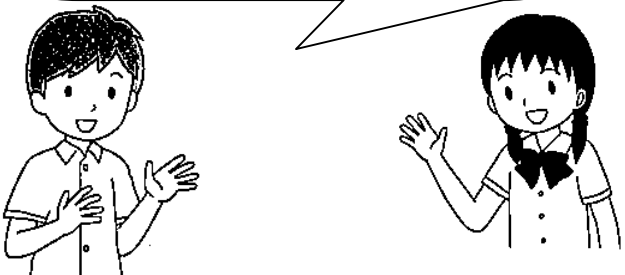
- ①皮を脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだとイギリスのシドニー・スミスと
かいう人が苦しかったという話がある
- ②淡灰色の斑入りの毛衣だけはちょっと
洗い張りでもするか、もしくはは当分のう
ち質にでも入れたいような気がする
- ③生で食べてしかるべきものをわざわざ
煮てみたり、焼いてみたり、酢に漬けて
みたり、味噌をつけてみたり好んでよけ
いな手数をかけてお互いに恐悦している
- ④なにもあんなに雑多なものを皮膚の上
へ載せて暮らさなくてものことだ

【話し合いの一部】

山田 ①は猫なのに物知りで、人間でもあまり知らないようなことを知っているところ面白い。

中川 ②は、できるはずのないことを、その気になればできるかのように語っているところが面白いと思う。

山田 ③と④には、共通した面白さがあるよね。



【注目した表現】③と【注目した表現】④には、
